（様式第３号の１）

博士（甲）論文審査及び最終試験結果報告書

平成29年 2月20日

文学研究科教授会　殿

論文審査及び最終試験委員
主査　　向井　剛　　印

副査　　地村　彰之　　印

副査　　ニコラス・ウォレン　　印

論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏　　名
英文学専攻	12 英博後 01	都地　沙央里

審　査　論　文　題　目	Textual Transition and Reception of the English *Reynard the Fox* （英語版『狐物語』の本文派生と受容）
論文審査及び最終試験結果	㊀　　否
博士論文提出資格取得日	平成 27 年　3 月 24 日
博士後期課程退学日	平成 28 年　9 月 30 日

論文審査及び最終試験結果の要旨

学位請求審査論文の題目：
Textual Transition and Reception of the English *Reynard the Fox*
（英語版『狐物語』の本文派生と受容）
（英語論文、126 ページ）

提 出 日：平成 28 年 11 月 30 日
公開審査日：平成 29 年 2 月 20 日
提 出 者：都地　沙央里

＜論文概要＞

本論文は、英国で読み継がれてきた動物叙事詩『狐物語』(*Reynard the Fox*) の本文編集に焦点を当て、書誌学と書物文化史の観点から、1481 年の初版から 19 世紀の版に至るまで、作品がたどった本文編集の変遷と派生、及び読者層と受容の様子を明らかにするものである。

論者の研究手法は、書誌学と初期印刷本の調査技法を用いた本文の比較分析であり、テクストを各時代の社会的産物とみなす立場(D.F. McKenzie (1999))から、作品のテクスト、ペリテクスト、パラテクスト(G. Genette (1987))を社会・文化史的視点から解釈をほどこすものである。

調査の対象は、W. Caxton がフラマン語から 1481 年に英訳・出版し、様々な編集を受けながらも 19 世紀後半にまで連綿と続くキャクストン版本文の系譜である。従って、本論文では、（1）1481 年の初版から 1600 年の Edward Allde 初版まで、（2）1620 年の Edward Allde 版から 1701 年の T. Ilive 版まで、そして（3）読者が大きく拡大する 19 世紀の諸版が対象となり、Caxton 版から本文が大きく逸脱する、1697 年の W. Onley 版に始まる 18 世紀の諸版は、比較の一貫性を保つ観点から調査の対象外となっている。

第 1 章では、先行研究を補完・訂正するステマが提案されている。先行研究を訂正する事実として、Pynson 初版 (1494) は Caxton 初版のみに依拠するものであり、Pynson の第 2 版 (*c.* 1500) は彼自身の初版には依拠していないことが明らかにされる。その理由として、初版の本文が、植字工の目移り、時制の誤り、語順の不規則性など、テクストづくりに粗雑さが目立つこと、法律書を専門的に出版する欽定印刷家(King's printer)の名に相応しい作品とはなっていないことが指摘される。

一方、Pynson 第 2 版は、テクストやパラテクストにおいて改良の試みがなされていること、独自に付け加えられた本文の概要（シノプシス）は、その後に続く Allde 初版に受け継がれることから、Pynson 第 2 版は、初期印刷本期の『狐物語』において、鍵となる位置を占めていることが論じられる。さらに重要なこととして、Allde 初版は複数の底本に依拠する「複合テクスト」としての特徴を持つことが初めて証明される。

第 2 章では、Edward Allde による改訂縮約版（1620 年）が、若者を対象にした作法書や徒弟文学が流行するなかで、『狐物語』に「欄外モラル」を配置することにより、教化の要素を色濃くする版になっていることが述べられる。口承文学の伝統を残す読者（聞き手）への呼びかけの削除、ダイアローグのナラティブへの変換、新語や専門的用語を用いた文体と語彙

の洗練化、同時代の読者の知識・教養に訴える細かな書きかえ、また猥褻な箇所の語り直しや、当時の法律に合わせた誓言の削除も観察される。このような、時代に合わせた本文の書きかえ、精緻な編集、巧みな欄外教訓はこの版の好意的な受容に寄与し、17 世紀の間、この作品に人気作としての地位を確立させたことが論じられる。

第 3 章では、『狐物語』の二つの続編（第 2 部、第 3 部）と継続的に人気を博した第 1 部との販売戦略が検討される。当時、版権をほぼ独占的に所有していた書籍商 Edward Brewster が、在庫として抱える第 2 部と第 3 部を巧みに第 1 部と抱き合わせで販売を試みる姿をその標題紙の言葉遣いと宣伝から推測する。その痕跡ともいえるものをボドレー図書館（オクスフォード大学）蔵の現存コピーに見出している。

第 4 章では、19 世紀の上品さを重んじる社会的思潮と、読者大衆の誕生という文化的状況のなかで、編集・出版される『狐物語』の本文分析が試みられる。Caxton 版に忠実なアカデミック版から時代の思潮に合わせて改竄('bowdlerization')がなされた大衆版に至るまで、編集基準を異にする多様な版が生まれたことが、なかんずく猥褻な箇所の取り扱いをめぐり、論じられる。

＜講評＞

本論文は、研究遂行に必要な、書誌学、書物文化史の最新の理論を踏まえながら、4 世紀にわたり出版された『狐物語』の一次資料を読み解く作業から生まれたものである。その成果は、分析技法と考証が堅実であるのみならず、優れた論文に必要とされる新見性、洞察力、説得力を持つ、第一級の書誌学的研究となっている。その新見性は、とりわけ通説を覆す新たなステマの提案、「複合テクスト(composite text)」の特徴を有す Allde 初版の解明、に見て取れる。これは、英語版『狐物語』の本文研究史上、画期的なものであり、今後は定説となっていくであろう。また、テクストを社会や文化状況に据えて解釈した Allde 改訂縮約版（1620 年）の考察は、斬新かつ説得力に富み、論者の文学的センスを感じさせるとともに、文化論的にも興味深いものとなっている。しかし、『狐物語』3 部作の販売戦略に対して推論を構築する過程で、ボドレー図書館蔵コピーの書誌記述にある 'erased'（抹消）をめぐり、熟慮が足りなかったのが惜しまれる。今後の精緻な議論の展開を期したい。

以上のことから、論文審査委員会は、本論文が「博士（文学）」の学位に相応しい研究であると全員一致で結論を出した。